永嶋福太郎編輯
鹿兒島戰爭
日記
後編
三号
辻文板

A429
13

官軍熊本へ連絡をとりたる以来い
賊兵漸次みなとゝ日隅の地ゑ
退去し　さても猛虎暴行のゆゑ
ゆゑ　一西々隆盛も一ト先び
人吉城ゑこゝを防禦とゝ
山田少將の精兵ゑ攻さた
されもつゝ日向の宮崎ゑ
篭もり　あゝ　池辺吉十郎
等の激徒已れがゆゝき
とカとゝの御船矢部木
山等の要地ゑ踏そまり一時
官軍ゑ枕もるこの人どもいたゝひ
永くたのちがゝ只一戦ゑちぶ

▲らま日向ゑ佐土原高ゝくゑらきゝ
して豊後ぐちゑ突いんと延ば

▲岡城と根據とさゞゑ
豊日の国峡とゝて
一度竹田城と畧
取し先鋒大分縣廳と占ん
とせうど警視海陸の

010190510200
48-7889

つゞき 諸軍ハ追撃セラレ再度
国界重岡ト椎峠ハ對戰ス
ト数日ハシテ砲声止ミタル
ヒガ官軍ハ重
岡ハ本営ト
ヒ警
備ヲ
▲重ヒ
賊兵ハ
襲撃スルトカネテ

池辺吉十郎

会報
知カラ然
ル共方ハ韓信ノ嚢
沙ノカラクトモ
※楠公ガ神業ノ
術ヲ合ハセ
古今無双
開闢以来未曾有
の新発明一種飛び
切りの大奇計ヲ

追々矢川内熊田辺ハ退キ
シ再度豊後路ヘ突キ入ラント
高千穂ノ賊軍ヨリ新手ノ兵ヲ
探出シ総軍合ハセ七百有余人隊
伍ノ足並動々ト地上ハ鳴リ
官軍本営ヲ攻撃ヲシト重岡ヲ
クヽヲ三里ノ地ハカリ
タル此時官軍ヨリ
カネテ出張セ探偵人ヨリ
日向路ヘ退キ賊軍ハ高
千穂ノ賊営ヨリ手ノ
兵ヲ加ヘ平日此ヒヽ
襲来ヲセバ勢ヒヨリ▲

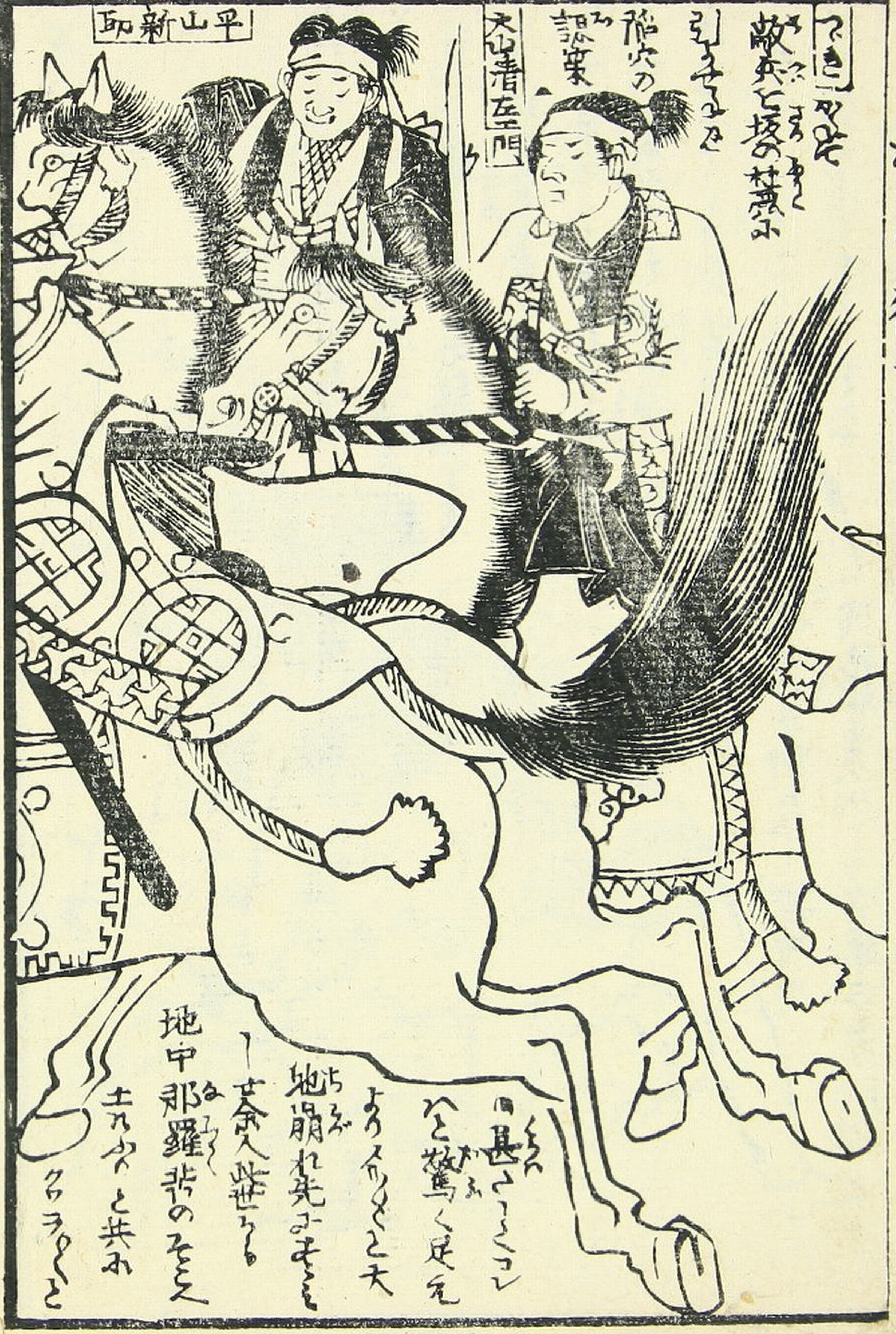
※設ケ暴
慢激徒の膽玉ヲ折
挫ギ一挙ニ賊兵ヲ
鏖殺ハ兵ヲ火
急ハ工兵ハ命令ヲ

赤松峠のフト里俗段々坂
の下ハ中五間深サ一丈余の陷穽ヲ堀切セ

つゞき その近辺の在家より糞と小便と夥多く持運ばせて吹中わさへさせ竹薄枝などとあつめて其上ふ土と盛み平地のやうふ作り准備十分ふそのひそれば賊兵の襲来今ふ遅しと待ところふ勢ひ満る賊の先鋒四百ばかり襲撃の喇叭の音も高く小ぶゑふいざうせ此等の大将新納兵助小隊長少平山新助大山清左エ門伊集院隼太郎

等のもろ〳〵号令の旗を打揮うまくめ〳〵と呼ろつて兵士をみは只下様ふ追ふろ重囲へ突入せんとするの〳〵猛虎汐河と渋ろ悪竜昇天ふその勢ひと現ハー八十人の銃隊ところ先ふ神立殺気と合ミ兵士ともろく〳〵声を発し彼段〳〵坂と目ふ近るまふ小銃と雨のごとく坂上ふ備へし陸軍隊と主ともけれい此方ふ先期ふと故真ふ砲ども両軍の銃隊樹間山陰ふ身をとゝせ人

▲地上ふ伏ること撒兵の手術を尽し暫時の間砲戦ふ及ひしろ官軍方ふ



できへとて敵兵を坂の林薮に引よせるぞ陥穴の謀策

扨甚さんコレへと驚く足元より忽ちと大地崩れ見る間に一丁余人此世なる地中那羅奈の底へ土煙と共にクワラクと

俺まへきまよ向ふの敵か暗らまぎれ漸々に続く隊伍を乱し▲

▲うしろの方へと引退きされば敵兵夫と見るより敵の漸次に浮足なるぞ兵助自ら陣頭に馬を乗出し真一文字に冷き氷の刃を抜ひらめかし此図と外きを切らるやと新納

まちやくと下知なせば死をも恐れざる薩摩武士ここぞ一番に切入らんと勇気に誇る壮者廿余人暗々闇なる畑中より覚への強刀をさしてまっ平一さんに坂を上らんとする時忽然と臭気鼻頂をつらぬくと

陥ちうたれは是へくると打駆き身を起さんとされべツベに足突おれば ヅヅヅと身体此所に究まりて如何んともするもと雖ども糞中に伏縛ひて叫ひ動めく計り

此とたん一声の号砲 ［つづく］

つゞき

ゆくと思へば左右ハ繁茂ハ一夜の
ちらう時分ちらと号令ハ一時ハふるひ出を
小銃の玉ハさるゝ雨ハらう是面ハなけざる有
さるゝ宛中ハ落し賊兵ハ業せる
火責ハこゝ〳〵くる宛中ハ
討ハ死ス　その体と見る
ゝ新納兵助ハいろ
眼中血とをき獅子
憤身の形
相となり

黒の薩ア駒の七ハ
駿足ハいうけ一つくら置て黒白ダン
グラ深の手綱とかい振り兵助ハ

▲この激烈なる勇気ハ
官軍さも防き　の暫
時隊伍と是賊兵
のうちハ追立
ら是
▲重
岡の
うへ退く

紺ゝとゞの腹巻を着し三尺
あまりの強刀を横ゝ白綾
さんで後ろ鉾ハ左手ハ
号令旗を携へ鞍ハ
突ッ立きゝ敵ハ
いでその我ハ是ハ薩ア武士の
脚ハ人と見せ下ハ
吳んと号令旗とハ立英気
ゝ兵士と励ハ烈ゝ
下知とハ再ひ隊伍と
立直し三方ハ打下ハ砲玉と
殊ともせず同ゝ小銃と連
ハ三方ハ向ひ攻登れハ

処と得ハと
賊兵追ハ
官軍殆んと
危ふく既ハ
官軍ハ砲
黒賊ハ為
ハ奪ハ
とする大苦戦
此時重岡ハ
本営ハ
かゝ載ハ
もや有んとの
注意を左

つぎ 右の樹間に兵をかくすると
あなどり十分賊のせまるを一そろと計り
一砲の号令に鑾殺しかくれと相
図の号砲とともに綾千鳥二丁に
備へる小銃の筒ともに烟と
ものふ敵兵の左右より連発せ
うべ勝み乗る敵兵も不意と
うれて途とまどひ討るるもの数
あまぜ大将新納兵助も一発の
砲丸に倒の下とうちゐる
二言といはず相果
なれば大将うたれて
残兵全くくんや

◆らんとする後陣の兵へあらひ
かくれべ先手の兵も大きに
あどろき進むと叫ぶを坂
下へ崩れかるゆえ
その混ざ
りをく◆

◆島津五
左エ門馬上に
あらてあらひ
声をうして制
しれども更
に隊
伍を

忽ちに敗れて
敗走あり
そうこう
さるほど二陣
ある島津五
左エ門の先手
一隊◆

新納兵助

◆大将
戦ときくうり是を救へんと
烈しく進撃の号令を
ゆさ〜勢ひ破竹のごと
坂上とさして攻のぼる折〜◆

◆敗軍の賊
兵官軍にあひ
うちぬけ右往左往
に逃げまどひ麓のくま
雪頽をつき今あり上に

立直せとあるを
官軍ありと坂
上に盛んに此
機とたちまち
撃ちたてと
大小砲を
打並へて

又ぶと
立る賊軍
と目をみ徹
塵ふるひと
くち下に

[ふき] ふそ賊兵倒るゝもの多く島津の手足ふ二三ヶ所の王疵とうけーゝゑ家早とはまそまろと乱れー兵と引きゝゝ高千穂の本営さて引上ゝーゝ官軍追撃せゝとの所ふ軍を止ゝ守線とゝ味方の大勝利と祝ー賊兵遠く退ゝーー様子あはへ急ふ襲来ゝゝゝきー

▲頓もけんゝゝる折ゝゝの近ゝふ住居ーく休戦の会

会せゝと ゝゝひ餅菓子 ゝゝ菓めのホヒ

ゝはく探偵のあと出ーて敵の走跡とゝゝゝせ兵士へ終日の戦労とゝぐさあんと酒食と将校ゝ配与ゝゝれべ兵士ハ鉄砲と組ゝゝ此所彼所ふゝゝ熊ひ欝気をゝゝゝ玉ゝゝき更へ一吞▲

島津五左エ門

来ゝゝ官軍の線内をゝゝゝゝゝゝ共日の業ゝひとまるゝ多ゝれべ官軍ゝゝふゝも強てゝゝゝゝ止めざゝーゝ此日もゝゝふ夕六時よゝの休戦

かの小商人芋種々の次

[illegible]食のとなりさん消兵の線内ふらふらして　△脱がうとする商賣人
品々となりたるを折り〳〵一人の魚賣人ちらりふ　の次第を一同のあめ
声を励まし呼あるく　かる災害を
兵士の面々酒なども肴のるたを▲　被むりしら
と問さるみ
▲憂ひ一処るとべこと幸の酒の肴とは　魚肉と
うを一尾の鯛をのあを手料理ふらうく　食して
温燒みて二人至極の珍味ありと各々　ろの
箸と交へて食つ〳〵久〳〵ぶ　生魚と食ー
うとを舌鼓をうしあるゲ頃て一人の兵士腹痛みて　の
苦しむ体ふ夫ふ居たりあ大きふ駭きいをせやと　を
△と

介抱する折ふ〳〵各々　△らよ食
腹痛を出して吐　ちしるる奥岡
ー浮きやう腹を　とりよせ
かへて苦〳〵されば　検査せう
此災害ふたざる者へ　みを全く魚の口つぐ
この体をこそ心ゆき
〳〵ぶ思ひ早速隊
長のの〳〵走りてこの
由を言ふをれば捨
ておけと隊長自ら
医員と伴ひ出張して
診察を加へらるれば暫
くして兵士ら苦つうと△

つゞきより毒菜をそゝぎ入まゐらせんとのたくみなりと
さればこそ賊兵が今日の敗戦を遺憾
に思ひその鬱憤をはらさんと佐ふ
魚屋と姿をかへ兵士をあやま
さんと謀りしものなれども
さいはひにして兵士にてが
ありしかば天正道を
助け邪賊の謀りごとを
果させざりしなり
かゝる災害をひく
なりしより線内出入の
商人へ鑑札をあたへ無鑑札の者
一切食のものを求むることを禁ぜられしとぞ

官許 朝鮮名法 牛肉丸

小袋 六戔二厘五毛
中袋 十二戔五厘
大袋 二十五戔

一 此くすりは男女にかぎらず [illegible]

書物錦繪店 東京横山町三丁目二番地 辻岡屋文助